

「新しいそよ風」

先日、映画の試写会のお誘いを頂きました。正式公開前の、まだ音響や映像の加工が整い切る直前の、試作段階の映画の試写会でした。もっとも、試写会とは言っても、どこかに行って特別な部屋で映画を観たわけではなく、今はインターネットを通じて、なんでも観られる時代ですから、牧師館の書斎のパソコンで一人試写会をしたというだけのお話です。でも、試作段階の映画ということで、撮影スタッフが写り込んでいたり、背景セットの間から片付けた大道具が見えていたりという映像は、とても新鮮で、これはこれで良いもの観させてもらったな、という気持ちになりました。試写会のお誘いを断らなくて良かったと思いました。

と言うような、私の直近の「新しいそよ風」のお話でした。さっそく、説教の本題を差し込んでしまいますが、「新しいそよ風」って、そういう感じの、自分の人生やこの社会にさして大きな影響はないけれど、でも、なんだか新鮮で、興味深い出来事という意味です。「新しい風が吹く」と言う、なんだか大きな変化が突然やって来た、という印象を持ちますが、そこまでの確かな手応えは感じない、でも、今までには無かったちょっと気になる出来事という、そういう意味で「新しい、そよ風」ということです。私たちの人生にも、私たちの生きるこの社会にも、そして、聖書が伝える福音の中にも、決して大きな衝撃は無いけれど、静かで慎ましやかな出来事に過ぎないけれど、でも、意義深い出来事って、あると思います。今日は、その最初において「うつろ」に過ぎなかった出来事が、でも、後の展開や歴史の中で大きな意味を持つようになったという、そんなお話です。意気消沈しながら故郷に帰って来たナオミさんと、ナオミさんを慕ってイスラエルの地を初めて踏んだ「新しいそよ風」としてのルツさんが登場してきます。

まずは、今日のお話に至るまでのことを、少し確認します。ベツレヘム出身のユダヤ人であったナオミさんは、同じくユダヤ人の夫エミメレクさんと2人の息子と共に、モアブという土地に移り住んでいました。移り住んだ理由は、農作物の不作という、いわゆる飢饉がベツレヘムを襲ったからです。大きな覚悟を伴う移住であったかと思います。モアブとは、イスラエルにとって異邦の地、外国です。民族主義的傾向の強いイスラエルにとって、異邦での生活には色々と不便や葛藤もあったことでしょう。しかし、ナオミさんとエミメレクさんの2人の息子は、モアブの地で、それぞれ妻を迎えました。ここまでは苦難を共に乗り越え幸せを築く家族の物語です。しかし、今日のナオミさんの言葉を、そのまま借りるなら「全能者がわたしをひどい目に遭わせた」と言うような出来事が起こります。ナオミさんの夫エミメレクさんの死、そして、ナオミさんの2人の息子の死が、その「ひどい目」ということです。異邦の地で、ナオミさんは、夫と息子に先立たれ、嫁2人との生活となりました。先行きに不安を憶えるナオミさんの元に、風のうわさで「故郷ベツレヘムの飢饉は過ぎ去った」との知らせが届き、ナオミさんは故郷に帰ることを決断します。そして、まだ若い2人の嫁に対しては、モアブにある自分たちの実家に帰るよう勧めたのです。

そのような背景があった上での、今日のお話です。もう一人の嫁は、ナオミさんの説得に応じて、自分の実家に帰りました。しかし、ルツさんは、こう言ったんですね。「わたしは、あなたの行かれる所に行き、お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民。あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです」。ここまで言われると、さすがのナオミさんも「そうか、分かった」としか言えず、ともにナオミさんの故郷であるベツレヘムに帰ることになったのでした。

しかし、この2人連れの故郷への帰還は、全く喜ばしいものではありませんでした。新共同訳聖書では、今日のお話の途中にある小見出しに「うつろな帰国」という陰鬱な言葉を添えています。

また、21 節にはナオミさん本人の言葉として「ベツレヘムを出て行くときは、満たされていたわたしを、主はうつろして帰らせたのです」と書かれています。ナオミさんにとっては、嫁ルツの同伴でさえ、そのうつろを埋めるわけではなかったということも、特筆すべきでしょう。この時、ルツさんの存在は、誰にとっても、ほとんど無意味だったのです。

このルツさんの、残念ながら無意味に過ぎない存在感は、けれど、この後、大きな意味を持つようになります。結果から言ってしまえば、ルツさんは、イスラエルの歴史において、最も偉大な王様であるダビデさんの曾祖母、ひいおばあさんとなります。それは、つまり、私たちの主であるイエス・キリストの系図に連なる大事な女性ということでもあります。また、別の機会に話を深めることができればよいなと思うのですが、イエス・キリストの系図には、このように異邦人の女性が入っていたり、不倫女性や、娼婦の女性が入っていたりします。それは神様の選びの多様さと深さ、人間的価値観における相応しい、相応しくないという判断を大きく超えた御心があることを示していると言えます。

最初、ルツさんは、唯一の親類であるナオミさんにとっても、また、ナオミさんの故郷であるベツレヘムの共同体にとっても、ほとんど意味を為さない存在でした。しかし、神様は、この時点では非常に影の薄いルツさんに、大きな運命を託されていたということです。それが、多くの人に知られるのは、まだまだ先のお話です。

これから、アドベント、クリスマスを迎えるこの時期に、あえて、そんなルツさんのお話をしてみました。それは、我らが主イエス・キリストも、最初は、ルツさんのように影響の薄い存在であったと思うからです。私たちは、クリスマスの意味を、後付けで知っています。主の十字架と復活という尊い結果を知っている上で、クリスマスの意味を味わい、解き明かしています。けれど、その結末を知らない、当時の人々にとって、果たしてイエス様の御誕生の出来事には、どれほどの意

味があったのでしょうか。確かに、その場面には、羊飼いや博士たちが集まります。しかし、その人数や規模は、馬小屋に入る程度の非常に慎ましやかなものです。最初のクリスマスは、世界という大きな枠組みの中では、とても小さい、ほとんど無意味なものだったと言えるでしょう。イエス様がこの地上にお生まれになったことの、本当の意味と目的を、すべて知っておられたのは、神様だけだったと思います。マリアさんも、少しは弁えていたのかも知れませんが……。細かいことを言うなら、少年期のイエス様への振る舞いを見る限り、普通のお母ちゃんとしてイエス様に接してように感じられます。神殿巡礼の際にイエス様が迷子になった時の話とかですね。

実は、クリスマスと言うのは、無力で無意味で、小さく儚い存在が、でも、私たちの想像を大きく超えて、この世界で活躍される、その始まりの出来事なのです。最初から、大きな希望や光や力が、十全な形で与えられるわけじゃない。最初は、ほとんど無意味で、世の多くの人にとって無価値で、非常に小さな灯でしかない。でも、神様の預言や御心を信じることで、その小さな灯が、世界を救い得るほどの大きな可能性を持つようになる。そう教え導くためのクリスマスなんだ、という、そんな理解の仕方があっても良いと思います。

神様は、最初、「新しいそよ風」を吹かせます。微風です。風速計も回らないかも知れない。多くの人にとっては、頬を撫でる程度の無意味な日常の出来事です。しかし、そこから神様の壮大な御計画は始まっていく。私たちの思いもよらない結末へと導かれていく。異邦人の未亡人の若い女性が、偉大な王様のひいばあちゃんになるように。無力さの塊でしかない幼子が、多く人を教え、癒し、最後、十字架によって世を贖うことになるように。そして、敦賀の地に教会を建て、幼稚園を建て、多くの大人と子ども達を招くことになるように。ひとたび、キリスト教信仰に触れたならば、実は、この世界は可能性ばかりです。諦めるにしても、その先には、また新しい希望が見え隠れしています。うつろも、幼さも、苦みも、貧しさも。私たちが人生や社会を悲観する理由にはなりま

せん。未来を期待できる新しいそよ風は、わりといつも吹いています。そのことに気付いて、心を上向かせる感性のことを、もしかしたら「神様への信仰」と言い得るのかも知れません。次週からアドベントを迎えるにあたり、早速クリスマスへの期待を膨らませつつ、ぜひ「信仰深く」歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちのために尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。あなたは御心のままに、この世界を支配され、歴史を導かれてゆかれます。その始まりと結末を、私たちが結び付け、前もって未来を知ることはできません。しかし、あなたは、この世界を愛してくださるがゆえに、きっと良い未来を備えてくださいます。クリスマスから始まる救いの物語はまだ途上に過ぎず、必ず世界の平和は叶うと信じます。どうか、あなたを信頼することから始まる、穏やかな日々を、恵みを数えたいくなる毎日を、私たちにお与えください。差し当たり、今年のクリスマスに向けて、喜びと感謝を味わいつつ歩んでゆくことができますように。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

12月召天者を憶える祈り

詩編 33 編 12～15 節

いかに幸いなことか／主を神とする国／主が嗣業として選ばれた民は。主は天から見渡し／人の子らをひとりひとり御覧になり、御座を置かれた所から／地に住むすべての人に目を留められる。人の心をすべて造られた主は／彼らの業をことごとく見分けられる。

橋本よ志 はしもと よし (1971 年 12 月 13 日召天)

橋本久臣 はしもと ひさおみ (1986 年 12 月 13 日召天)

石山すゐの いしやま すずの (1993 年 12 月 13 日召天)

吉谷はつ よしたに はつ (2012 年 12 月 15 日召天)

橋本敏子 はしもと としこ (2011 年 12 月 16 日召天)

笹本房太郎 ささもと ふさたろう (1997 年 12 月 19 日召天)

片山朝子 かたやま あさこ (1996 年 12 月 19 日召天)

武長哲也 たけなが てつや (2022 年 12 月 20 日召天)

片山奥右衛門 かたやま おくうえもん (1987 年 12 月 21 日召天)

山登美代子 やまと みよこ (2009 年 12 月 22 日召天)

柴田はや しばた はや (1926 年 12 月 25 日召天)

上田敏夫 うえだ としお (2011 年 12 月 27 日召天)

菅野りう すがの りう (1950 年 12 月 28 日召天)

赤澤道子 あかさわ みちこ (2005 年 12 月 28 日召天)

神様。私たちは今、この地上における働きを全うし、あなたによって備えられた道のりを走り終えて、あなたの住まう天へと帰っていかれた敬愛すべき兄弟姉妹のことを覚えて祈りを合わせています。あなたは、ご自身のことを証しするために、主イエス・キリストをこの世へとお与えになり、そして、その後も、主に従う多くの方々を聖別し、教会を担う器として祝福してくださいました。私たちは、この敦賀教会を担い、その礎を確かなものとして組み上げてくださった信仰の先達に感謝の意を表します。また、あなたによって与えられた命を燃やし、人のために、社会のために尽くして来られた友人を心に留めて祈ります。どうか、世の終わりの時まで、この 12 月の召天者の方々の魂が、あなたによって守られ、その生涯の道のりに相応しい、十分な恵みと慈しみの満ちたされますように。天の上には永久の安らぎを、地の上に慰めと導きをお与えください。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。